

# 保育職志望学生におけるボランティア体験の意義

## What did Nursery Department students learn in the volunteer-work class ?

新谷 龍太郎<sup>\*1</sup>

Ryutaro Shintani

ボランティア学習には主体的活動の源泉になることや、見知らぬ人と交流するためのコミュニケーション力が磨かれることなどの学習効果がある。各大学の取組みを整理すると、目的と活動内容を明確にした上で、中期的な関わりの中で自己変容が生じるようなプログラムが必要であることがわかる。本学のボランティアワーク受講生の授業の振り返りからは、ボランティア体験を通じて専門職としての規範意識や具体的なコミュニケーション技術、認識枠組みの組み換えや実習に直接的につながる学び、キャリア意識の向上などの学習成果があることがわかった。

キーワード： サービスラーニング、ボランティア学習、保育職

### 1. はじめに

ボランティア学習は、福祉的観点から展開される教育や、市民の主体形成という点からその必要性が論じられてきている。例えば、大阪市天王寺区では、子育て支援や保育ボランティア育成の事業の中で、地域での人材育成やボランティア学習推進の観点からジュニアクラブが組織され、区内の公立中学校などとの連携が図られている（上續 2017）。

大学教育においても、平成 24 年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～将来学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を契機として、学生が主体的に問題を発見し、解を見出す能動的学修（アクティブラーニング）への転換が求められた。その学修方法として、授業内でのディスカッションやディベートなどの双方向的なコミュニケーションに加え、インターンシップやサービスラーニングな

どの教室外学修プログラムなどを提供することが必要であるとされた。サービスラーニングとは、教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することで、それまで知識として学んだことを活かし、その体験から学問的取組みや進路について新たな視野を得る教育プログラムである。1930 年代のアメリカでは、ジョン・デューイの体験的教育理論を下に、市民団体により大規模なサービス活動が展開し、1960 年代後半に学生と地域開発組織を結びつけるプログラムとして「サービスラーニング」という言葉が使用されるようになった。1980 年代後半からは、ボランティア活動をサービスラーニングとして大学の正課授業に導入し、単位認定する大学が増加した（岩田 2016）。

ボランティア学習の成果としては、ボランティア経験が教育実習などでの主体的活動の源泉になることや、見知らぬ人と交流するためのコミュニケーション力が磨かれること、状況に応じて方法

と結果の関係を読み取る力を養うこと、異質な他者との出会いから「自分とは何か」に気付くきっかけとなることなどが挙げられる。一方で、ボランティアの目的があいまいで、活動場面が漠然としている取組みに陥らないように、活動の目的・内容・方法・評価を明瞭にして展開することが求められる（齊藤 2016）。

ボランティアを通じて期待される学習効果の一つとして、これまで「当たり前」と思っていた風景が違ったように見え始める、ということが挙げられよう。こうしたメタ認知のきっかけとして、活動の中で生起する問題に直面し、自分の力ではどうにも超えられない壁を感じたり、自分の価値観では推し量ることのできない相手と場を共有することが挙げられる。

自分と他者との関係性に敏感になり、自分の在り方を自省する姿勢は、人間関係の構築を専門とする教職で特に必要とされる。それは、日々の生活の中でも、気をつけなければならないことである。キャリア・カウンセリングや組織文化の研究者であるシャイン（Schein, E）は、妻の介護を通じて、「人を助ける」ということを介在した人間関係は、「助ける—助けられる」という立場を押し付けてしまう危険性があることを指摘している。したがって、「助ける」という立場に立ってしまっていると自覚する者には、「ワン・ダウン」の姿勢が求められる。例えば、「水を持ってきてあげようか」というのでなく、「一階に下りる用事があるから、ついでに水も持ってこようか」と、言葉のかけ方を変えてみるといったことだ（シャイン訳書 2009）。

同様の視点は、「ケア care」される側の視点を加えることで、よりよく理解される。ケアを中心としてこそ教育は最もよく組織されると主張するノディングス（Noddings, N）は、ケアする者の意識は、専心と動機付けの転移により特徴付けられると指摘する。専心とは、ケアされる者への開放的で、えり好みすることのない受け入れを意味する。ケアするときに、私は、他者が伝えようとしていることを誠心誠意聞き、見て、感じる。しかし、ケアリングの関係は、相手が私のケアしよう

とする努力を受け入れ、承認し、応答することで完成する（ノディングス訳書 2007、pp. 43-45）。言い換えれば、ケアリングの関係とは、相互性のあるものであり、ケアする側の一方的な押し付けでは成立しない。こうした関係性に気づく体験は、「教える」「世話する」という立場を自明視しがちな教職に立つものにとって必要なことであろう。こちらがいくら世話をしようと思っても子どもがそれを受け入れてくれない、気付かないうちに相手の気分を害している、そのような場面においてどのようにしてお互いに関係性を築いていくかを体験的に学ぶ機会を得られるという点で、ボランティア学習は意義がある。

例えば、障害者介助ボランティアでは、「介助者手足論」を規範とし、「必死な介助期」「楽しい介助期」「無意識の介助期」へと移行することが指摘されている（宮前 2017）。介助者手足論とは、介助者は介助利用者に対して主張や介入を行わないという規範である。最初は、ボランティアが自分の意見を主張することを避け、受動的に介助し「介助者手足論」という規範を自らのうちに強化する。その後、介助に自信を持ち、自分だからこそできる介助の意味を見出すようになることで、「楽しい介助期」へと移行する。介助を継続的に行うことで介助行為が「普通のこと」になる。ここには、利用者の自己決定と、介助者が想像した利用者の自己決定のずれを修正するフィードバックの積み重ねが存在する。言い換えれば、介助者は自分の想像する利用者の自己決定を、利用者本来の自己決定と錯覚する。

この移行は、宮前（2017）の言葉をそのまま用いれば、健常者と障害者の差異というフィルターの透明化過程と捉えることができる。「透明化」という言葉には語弊を生じさせる部分があるが、言い換えれば「障害者」から「一人の人間」として相手と関係を結ぶという変化である。しかし、これら移行は、「介助者手足論」が変化したわけではなく、その規範が極度に内面化されたことを意味するため、自身の立ち位置や、自分を取り結んでいる関係を自省する姿勢が求められる。その点に

留意しつつも、この障害者介助ボランティアの事例から示唆されるのは、一定期間ボランティアを継続することで、介助者の意識や利用者との関係性が変化するという点である。

以上のようにボランティア活動が学生に与える影響は大きい。そこで、本稿では他大学で教職科目としてのボランティア論を整理して、本学の設置する「ボランティアワーク」の意義について考察してみたい。

## 2. 先行研究

教員養成学部におけるボランティアやインターンについては、1000 時間体験学修で有名な島根大学や、大学教育 G P に選出された佛教大学、教育学部 2 年生約 400 名に対して教職インターンを義務付けている明星大学などが有名である。島根大学の事例では、正規採用された者のほうが講師採用された者よりも 100 時間ほど体験時間が多いという結果がでているものの、多く活動した学生が採用試験に受からないことなども紹介されている。有意義な体験となるためには、事前指導と事後指導が重要であることが指摘された。佛教大学では、ボランティアについては主体が学生にあり、学生が自由に選択して活動し、大学はコントロールをせず、単位も出さない。一方で、インターンシップは大学がミッションを作り、教師になる意志が堅固な学生に限り、受け入れ校の担任教師との見合いを行った上で受け入れ校が決定される。教職インターンについては、本来であれば教育実習の長期化により対応すべきところを補完する位置づけとなっている（林 2015）。

帝塚山大学では、生駒市と連携して子育て支援事業「サンデーひろば」に学生がボランティアとして参加している。月に 1 回、日曜日の午前中の 2 時間に行われる 11 回のプログラムである。1 年次では多くの学生が登録するが、学年があがると再登録しない学生が増えるという現象が見られる。また、参加回数が増えるほど自己評価平均が低くなるという結果も見られた。これは、参加するほ

ど視野が広がるためであり、継続して参加する中で、力不足の気づきに終わるのでなく、本当に自己評価を高めるところまで達する支援が課題となる（岡澤 2017）。

岡山大学では、学生がスタッフとして自律的なボランティア組織を運営し、スクールボランティアフェアなどの活動を展開している。県内の大学などの教育機関が地域の学校園や社会福祉施設でボランティア活動に関わるための交流の場を設け、このことが学生のチームワーク力や責任感、コミュニケーション能力の醸成につながると期待してのことである。スクールボランティアツアーなど、魅力的な取組みがなされるものの、学生スタッフの募集などが課題とされる（佐藤他 2016）。

愛知教育大学では、学年が上がるほど学校支援ボランティアに参加する学生の割合が増えている。これは、必修授業が減り時間が自由になることや教員への意識が高まることから、教育実習を終えた後も現場で学び、経験を積みたいと考える学生が多いためと推察されている。ボランティア活動の情報源は、半数が大学からの案内であるが、その他に教育委員会や学校からの案内が 3 割程度であった。実際に学校支援ボランティア活動を行った校種の 8 割以上が小学校であり、半数程度が週に 1 回程度の頻度である。ボランティア活動を通じて、6 割の学生が、元々教員志望でありさらにその思いを強くしたのに対し、教員志望ではなかったが教員を志望するようになった学生はほとんどいなかった。また、元々教員志望だったがその思いを弱くする学生も若干名であり、ボランティア活動は元々教員を志望する学生の思いを強化する機能を果たしていることがわかる（熊・岩田 2017）。

大正大学では、学校支援ボランティアに関する先行研究では、児童生徒の特性把握や生徒指導や教育相談・特別支援児への対応という指導技術を学んだという成果がある点を認めつつ、中長期的にみてそれら成果を学生がどのようなプロセスで獲得していくのかを検討している。ボランティアに参加する学生は、「気づき→分析→行動→結果→

あらたな気づき」というサイクルで学ぶことや、授業で学んだ知識をもとに児童理解をしていくことが明らかにされてきたが、大正大学での中期的学校支援ボランティア（3～9 ヶ月）の活動報告をもとにしたテキスト分析では、「子どもと先生の関わり」など問題場面への対応という課題から、子どもと自分の関係性を中心とする課題へと視点が変化していることが明らかにされている（犬塚・三浦・滝沢 2017）。ここから、短期的なボランティアでは、印象に残る問題場面が振り返りの中心となるが、中期的なボランティアでは子どもとの関係が築かれていくことから、その関係性が省察の中心となるという違いが読み取れる。

幼児保育学科学生が、障害者施設や幼稚園、病院、市との共催イベントで音楽ボランティアを行う事例もある。学生自身でプログラムを考え発表する中で、達成感や満足感を得ると共に、準備の仕方や気配り、連携、マナー、コミュニケーション方法について、学生たちが回を重ねるごとに成長する姿が報告されている（浦田・山口・平野 2016）。

また、学科の枠を超えて「地域ボランティア」として科目を立てることで、それぞれの専門性を活かした協働の機会となっている事例も見られた。ここでは、地域でボランティアを実施したというよりは、地域に触れ、地域から学び、ケアのスペシャリストへの学びを自覚するものとして授業が位置づけられている（合津他 2015）。ただし、その名称に「ボランティア」という言葉を用いる事については検討がなされている。原田（2013）が指摘するように、学校のカリキュラムとして体験活動や学習がノルマとして課せられ、教師により評価される活動はボランティア活動の準備学習や専門職への自覚を養うものと考えるべきである。この指摘を踏まえて、当授業の名称としてボランティアという言葉を用いるのではなく、コミュニティサービスへの参加を活用したサービスラーニングという位置づけが検討されている。

各大学の事例は次のように整理できよう。まず、ボランティアは学生の自主的活動であり、教職イ

ンターンは大学がミッションを課すものであるという区別である。その上で、教職インターンは、教育実習の長期化により対応すべき部分の補完として機能している。ボランティア活動は市と連携して展開されることがあるが、学生スタッフの継続的な確保が課題となる。学生が中心となりボランティア活動を展開することで、より積極的な学習成果が期待できる反面、継続性の確保はより困難となる。学年があがるほどボランティアに参加できる時間的余裕ができるが、活動参加の目的は元々教職を志望する学生の動機を強化し、教育実習後の経験を積むことが目的となる。一方で、実習に行く前のボランティア活動の意義については十分に検討されていない。ボランティア活動を通じての学生の学びについては、短期的なボランティアでは印象に残る問題場面の振り返りが中心になるのに対し、中期的なボランティアでは学生自身と子どもとの関係性の省察が中心となる。学生は回を重ねるごとに成長する姿を見せる。また、地域ボランティアを通じて学科の枠を超えて、それぞれの専門性を活かした関わりができる。ただし、大学がミッションを課し、教員が評価するという点が残る以上、ボランティア活動の準備学習や専門職への自覚を養うためのサービスラーニングとして位置づけることを検討すべきである。

保育者養成校の学生は、実習における対人コミュニケーションにおいて、乳幼児と仲良くなれるか、遊びやトラブルの対応ができるかといった不安や、保育者に対しては、自分の態度や行動、失敗が迷惑にならないかという不安を感じる（三澤 2015）。教育実習後に、より経験を積むためにボランティア活動をするという意義と合わせて、実習前のこうした不安や、人間関係づくりの基礎を学ぶという目的からボランティア活動を計画することが求められる。

### 3. ボランティアワークの授業概要

#### 全体像及び大学の支援体制

平安女学院大学短期大学部では、2014 年より

「ボランティアワーク」の名称で集中講座を設けた。幼稚園教育実習や保育実習が本格化する前の基礎的教育機会として始まったものであり、実習担当者が当授業を担当した。2015 年には市で行われる音楽イベントに参加し、翌年は市で行われる別イベントに参加するなど、市内イベントでのボランティア活動が増える形となってきた。夏期休暇のボランティアについては、事前指導を行ったのち、各人でボランティア先の打診を行い、ボランティア予定報告書を大学教員が確認するという体制をとっている。ボランティア学生に金銭的な補助はないが、授業の一環であるため保険対象となる。

### カリキュラム運営と履修年次・単位

「ボランティアワーク」は、幼稚園教育実習、保育実習が本格化するための基礎を養うことを目的としており、初年次生を対象としたカリキュラムである。通年で 1 単位の授業として設定されており、ゴールデンウィークや夏期休暇中の実地体験と、授業期間中の事前指導・事後指導に大きく分かれる。事前指導では、ボランティア活動に関する基礎的理解と、社会人として必要とされるマナーなどが指導される。活動後は振り返りを行い、活動を通じての学びを全体場で発表する。

### 活動内容

主な活動内容は、地域で行われるイベントに参加し、子どもとの対応を中心として、場内整理やゴミ拾い、運営支援などを行う。大学としてブースを設置する場合は、紙コップロケットの制作を行い、各回 200 名程度の子どもが学生と一緒に制作を楽しんだ。夏期休暇中のボランティアは、地域の社会福祉協議会での紹介を通じて、高齢者施設や障害者施設を中心として行う。近隣の施設や、知り合いの居る保育所などを選ぶ学生もいるが、その場合も金銭を受け取らないことを指導している。

### シラバス

2014 年度のシラバスでは、保育者に求められるマナーやコミュニケーション力、実践したことを記録することの学習を通じて、幼稚園教育実習や保育園実習に向けた実践力向上、キャリア教育の一途となることを目標とした。ボランティア活動は、障害において取り組むべき活動であり、自己を見つめ直す機会であると同時に、本学のキリスト教精神に基づく保育者養成という理念からも重要な科目と位置づけている。学習の到達目標として、マナーの理解や、良好なコミュニケーション方法の理解、実践した内容をレポートや記録物として書くことができる、体験したことを報告することができる、自己の課題を明確にすることができる、という 5 つを挙げた。学習内容の流れは、まずボランティア活動をするに当たっての必要な知識、児童福祉施設について学び、施設見学や保育所見学を行い、様々な障害を持つ人たちの理解をテーマとして外部講師を招いた。その後、グループ活動、個別活動でボランティア活動を行い、報告会を開催した後、夏期休業中の課題を課するという流れである。学習課題としては、「保育者を目指した動機」や、保育所見学・施設見学を通しての学び、障害のある方の理解や自分達の住む地域について調べることを課した。

2015 年度はボランティアワークでは、市で行われる音楽イベントへの参加や、キャンプ場での野外活動、歌遊びコンサートを通じた障害のある子を含めたすべての子どもたちの交流活動への参加などが行われた。夏期ボランティアの事前指導として、地域の社会資源調べや電話のかけ方の指導などを行った。2016 年度は、市で行われる別のイベントへの参加が加わる形となった。

## 4. 学生の意見

ボランティア体験について、学生は記名の上で振り返りシートに記載した上で、全体に発表することとなっている。この振り返りは成績評価に影響するため、規範的回答になっていることに留意

した上で、2016 年度のグループ活動と個別活動の振り返りから学生の意見を見てみよう。

市で行われるイベントに参加した学生は、「指示を覚えるようメモすること」といった基本的な社会人スキルや、「担当ブースの入れ替わりがスムーズにできるよう、自分の前のグループを把握し、連絡できるようにしておくこと」といった俯瞰的視野の必要性についての気づきがみられた。

夏期休暇中に行った個別活動では、施設種ごとに次のような振り返りが見られた。振り返りでは、印象的なエピソードと、ボランティア活動を通しての学びや今後の学習課題について記載してもらった。以下の内容については、筆者が語尾の修正などを行い、概要のみを紹介している。

#### ①高齢者施設

【ケース 1 周辺の参加をしながらも、ケアの専門性に気付いたケース】

事故があつてはいけなため、何も知らない自分は介護をしなかった。会話ができる利用者と話をし、配膳を少し手伝っただけだったが「ありがとう」と言ってくれた。家族のことや昔のことをたくさん話してくれた。「笑顔」「明るく」が大切だと思った。笑顔で明るく関わることで、相手も安心感がわく。自分に何があろうと、それは他人に関係ないことなので持ち込んではいけないと感じた。

利用者の状態に応じて食事の形状が異なっていた。細かいものやとろみのある食べ易い大きなもの様々あり、食器も滑らないものやなめなもの、持ち易いスプーン、食器などがあつた。食器洗いを通して、色々な種類の食器に触れることができた。利用者の状態を全て知っている職員たちがすごいと感じた。何も見ずに食器を分けたり、ストローをさしたり。この仕事をするに当たり、それは大事なことであったと思った。どのような行為をしたかを空いている時間に書いたり、車椅子を動かすときなどはしっかり声をかけることなどに気づき、学びました。

今回はオムツ交換など介護の本当の所は見なか

ったですが、良い経験でした。良いことしかなかったため、楽しくできたという思いですが、その裏には私には考えられないことが起こっているはずです。今回の体験で、私の進路は一つ増えました。どの仕事にしても、絶対大変で苦しいことがあると思うけど、笑顔のために私はがんばりたいと思っています。

Aさんは、「ありがとう」という言葉を相手から受けたことや、相手の話に耳を傾けることで良好な関係が築かれていることに気付くことで、ボランティア体験を肯定的に受け止めている。それは、「自分に何があろうとも、他人には関係ないので持ち込んではいけない」という、対人関係を基本とする専門職の規範意識につながっている。

食器洗いという周辺の業務に参画することで、食器の大きさの違いから、職員の利用者それぞれの理解を感じ取っている。これは、保育士として乳児の生活を援助する際にも必要とされる気づきである。

最後に、今回が体験であることを自覚的に捉えることで、見学した裏にある大変さに想いを馳せている。しかし、それを「どのような仕事にも大変なことがある」という構えに転化させ、自身のキャリア意識の糧としている様子がうかがえる。加えて、保育職以外にも自分の進路はあり得るというキャリア意識の拡大にもつながっている。

【ケース 2 高齢者との関係づくりから、具体的なコミュニケーション技術を学んだケース】

私は身近に高齢者がいない為、全ては初めてだらけでした。どのように声をかけていいかわからず、午前中は端の方に立っていることが多かったと思います。施設の方々はみなさん優しくとても気づかせてくれて申し訳なくなり、後悔しました。(中略)「話さなくても、近くにいるだけで安心する」と施設の方が教えてくれました。認知症の方は同じ質問を何回もします。その度に私も初めて聞かれたようにお返事を返した時に、否定するのではなくて、受け止めてコミュニケーション

を取れば良いと学びました。最後に施設の方々の反省会に参加させていただいた時に話を聞いていると、利用者の方は子どもに似ているな、と思いました。「〇〇さんと〇〇さんはよく喧嘩をするから席を話して様子を見てみよう」など大人になっても喧嘩をするんだと驚きました。

Bさんは、身近に高齢者がおらず、今回のボランティア体験をきっかけに高齢者とどのように関係を築けばよいかを学んだ。何をすればよいか分からずに立ったまま過ごしてしまったと後悔をした経験は、その後に幼稚園教育実習や保育実習に行った際に、どのように実習中に動けばよいかをイメージするきっかけになったと考えられる。

また、「話さなくても近くにいるだけで安心する」「同じ話でも初めて聞くかのように接する」「否定せずに受け止める」というコミュニケーションの方法について学んでいるが、これは子どもと接するときにも必要とされる共通の姿勢であり、本講座の目的とする学びを得ている様子が伺える。その要因として、「高齢者も子どものように喧嘩をする」という気づきに見られるように、高齢者と子どもの共通性が挙げられる。このことから、一見関係がなさそうな高齢者施設でのボランティア体験が、保育職志望の学生にとって意義あるものであることがわかる。

## ②障害者施設

【ケース3 障害者のイメージを転換し、相互性をもつケアリングの関係性に気付いたケース】

ダウン症や知的障害者の方が働く施設で、マグネット作りを一緒にしました。最初は見慣れないため不安な部分がありましたが、利用者の方から名前を呼んでもらい、私が利用者の方の不安を取り除いてあげなければいけない立場なのに、逆に助けられてばかりでした。利用者の方にできることは限られていますが、とても真剣に一生懸命仕事に取り組んでいました。職員の方はそれぞれ利用者の好き嫌いなどを、自分のグループに限らず把握しており、利用者の方が職員に抱きついたり、

仲良くじゃれている姿を見て、コミュニケーションがしっかり取れていて、お互いにお互いを必要とする存在であるんだろうなと思いました。短い時間でしたが、とてもいい経験ができ、また是非ボランティアに来たいなと思いました。

Cさんは、これまで出会うことのなかった障害者との関わりに不安を抱いていたが、ボランティアを通じてその不安は取り除かれ、また機会があればボランティアをしたいというように意識が変化している。その過程には、自分が利用者の不安を取り除かなければならないという立場にあるのに、実際には相手に助けてもらったという経験が介在している。ここには、無意識的に持っていた健常者—障害者のカテゴリーにある＜助ける—助けられる＞という関係性のイメージが、自分が＜助けられる＞側になることで覆されるという転機があったことが伺える。このように、日常生活において自明視してしまっている関係性を見直す機会がある点は、ボランティア体験の意義として挙げられよう。

また、高齢者施設の事例と同様に、職員が利用者それぞれの個性について理解し、そのコミュニケーションの在り様から「お互いを必要とする存在」というイメージを構築している。このことは、保育職につく上でも、子どもの個性を理解し、＜教える—教えられる＞という関係性にとどまることなく、相互性をもつケアリングの関係性のイメージの源泉となる可能性があるという点で、ボランティア体験のもう一つの意義として挙げられる。

## ③子育て支援施設

【ケース4 保護者同士のコミュニケーションを見たり、絵本の読み聞かせの機会が得られたケース】

利用されているお母さん同士が、子どもがいつ何ができるようになったかということを、異年齢のお母さんから聞いたり、相談に乗ってもらったりして、経験者のお母さんに話を聞いたり、相談したりすることで気持ちが楽になったりする

のかと感じた。子ども同士が同じおもちゃの取り合いになったときは、まだ子どもが声に出してしゃべれないから、お母さんが子どもの代わりに謝ったり、喧嘩の仲立ちをしていて、そういうお母さんの姿を見て子どもが学んでいくと思った。手遊びをしているときは、お母さんが子どもの手を動かしたりしていた。絵本の読み聞かせの時は、話を聞かず遊んでいる子どもがいる中で読んだり、途中で泣き出してしまったりする子どもがいる中で、最後まで聞いてくれる子どもが多かったし、施設の保育士の方から読み方や絵本のチョイスを褒めていただけたのがうれしかった。帰りの体操では、体を動かすダンスのような曲と親子でドライブに出かける曲だった。2 曲目はお母さんとお父さんが子どもを膝の上に乘せて一緒に楽しんでいる、私も小さいときは、このような親子でやるようなことをやっていたと親から聞いて、小さい頃から親子でスキンシップをとることは大事と改めて感じた。この 1 日で、保育所、幼稚園とは違う子どもとの関わりをできたので良かった。

D さんは、子育て支援施設でのボランティアで、保護者同士のコミュニケーションを直接見る機会を得ることができた。この経験は、実は「先生」という立場になってしまうとできない経験である。保護者同士の会話の中に、「先生」が混じってしまうと、そこに本音を打ち明けられる率直なコミュニケーションの場が生まれにくくなることもあるためだ。その意味で、保護者がどのようなことに不安を抱き、日ごろからどのようなコミュニケーションを取っているかを見た経験は、子育て経験を持たないまま保育者になる学生にとっては貴重なものになろう。子どもとスキンシップをはかる親子を見て、自分の子ども時代に思い出し、自分の親にも子どもの頃の様子を聞く機会となっていることも、保育職を志望する学生のキャリア教育という観点から望ましい効果を生んでいる。

また、I さんは絵本の読み聞かせの機会を与えてもらっている。1 年生の後期で行くこととなる幼稚園教育実習 I でも、こうした機会が与えられ

ることはあるが、実習に行く前にこうした経験、特に「途中で遊んだり、泣き出したりする子ども」と出会った経験は、実習に臨み準備する意識を高める上で大きく影響したであろう。保育所や幼稚園とは違う子どもとの関わりをできた、という点も重要な点であり、子育て支援施設での意義は大きいと思われる。

#### ④大学附属幼稚園

【ケース 5 体力測定を通じて、子どもの発達イメージをもったケース】

3, 4, 5 歳児で体力が大きく変化することがわかりました。3 歳児では男女の差がそれほどないのに、5 歳児になるとまったく違っていました。性格の違いによって、もう一回やりたがる子どもややりたくないという子どももいて、一人一人の対応をかせなければいけないと思いました。

3 歳児は説明の途中でどこかに行ってしまった、手の置く場所はこうだよと言うと、自分がおいた手の上に重ねたりと、説明に戸惑いました。4 歳児になると、一回やったことがあるため、説明をするとスムーズに体力を測ることができました。しかし、左手と右手のどちらでボールを投げるかをまだ把握できていない子どもも多く見られました。5 歳児になると、何もいわなくても自ら測定する子どもも多く、3 歳児の半分くらいの時間で終わりました。このことから、年齢によって、説明や遊び方などで、どうすれば興味を持ってくれるかを考えて行動しようと思いました。

E さんは、附属園の体力測定のボランティアを通して、年齢による体力の違いを、男女差にも留意して気付くことができた。また、説明の理解についても年齢差がみられることを実感し、5 歳児は 3 歳児の半分程度の時間で測定が終わるということを経験している。このことは、2 年次の設定保育を含む幼稚園教育実習 II で指導案の時間の目安を考える際に役立つと考えられる。

## 5. 考察と今後の課題



2016年度のボランティアワーク受講生のアンケートから、学生が次の四点について学びを得ていることがわかった。

第一に、高齢者施設に行ったAさんのケースでは、感謝の言葉を受けたり、相手の話を傾聴することで人間関係が築かれていくことで、ボランティア体験を肯定的に受け止め、対人関係を基本とする専門職の規範意識が芽生えることがわかった。また、食器洗いという周辺の業務に参画しながら、職員が利用者それぞれの個性を把握し、信頼関係を築いていることを目にする中で、一人一人を理解することが信頼関係の基礎となることを学んでいる。同じく、高齢者施設に行ったBさんは、「話さなくても近くにいるだけで安心する」「同じ話でも初めて聞くかのように接する」「否定せずに受け止める」というコミュニケーションの方法を学んでいた。

このことは、障害者施設に行ったCさんでも同様に見られる。利用者と職員が相互に依存する関係への気づきから、＜助ける―助けられる＞という関係性に潜む階層的構造から脱するような、相互性のあるケアリングの関係イメージをもつことができた。すなわち、ボランティア体験を通じて、保育職に欠かせない人間関係づくりの基礎やコミュニケーション技術を学ぶことができる。

第二に、自分の持っている認識枠や価値観の捉え直しの機会となっている様子が伺える。障害者施設に行ったCさんのように＜障害者＞イメージの変化や、普段高齢者と接することのなかったBさんが気付いた高齢者が持つ子どもの部分への気づきなどである。

第三に、幼稚園教育実習や保育実習に直接的につながる学びの機会となっていることが挙げられる。高齢者施設で、何をすれば分からずに立っていたことを後悔したBさんのケースや、保護者同士の会話から子育ての不安や方法を学び、実際に絵本の読み聞かせの機会を得られたDさんのケース、附属園での体力測定で子どもを観察する中で発達段階の違いに気付くことができたEさんのケースなどがこれに当たる。

第四に、キャリア意識の向上が挙げられる。高齢者施設に行ったAさんは、自身の体験が短期的であることという自覚から、目に見えていないシャドウワークについても想像し、「どのような仕事にも大変なことがある」という構えを作った。また、保育職以外のキャリア意識への拡大も見られた。子育て施設に来る親子を見て、自分の子ども時代について親とコミュニケーションを取る機会を得られたDさんのケースは、「なぜ保育職を志望するのか」という原点に立ち戻り、自己分析を行うきっかけになり得る。

今回取り上げたケース以外にも、児童養護施設での夏祭りのボランティアや、児童館でのボランティアに行ったケースも見られた。これらボランティア体験では、子どもと関わる機会が多いため、幼稚園教育実習や保育実習に直接的に結びつくと考えられがちである。しかし、今回取り上げられた高齢者施設や障害者施設のように、保育と直接関係しないかのように見られるケースで、より深い学びを得た学生も多かった。

このことは、ボランティア体験に関わらず、座学科目を考える上でも示唆に富む結果である。すなわち、保育に直接的に関わると考えられがちな科目だけでなく、一見関係のなさそうなことから、学生は深く学ぶことがあるということだ。短期大学では、在学期間の短さから余裕をもったカリキュラムを講じることは簡単ではないものの、学生の深い学びを担保するような、一見「ムダ」に見えるような「学びの地図」を描く余裕こそ、今後の保育者養成機関に求められよう。

今後の課題として、中長期的なボランティア活動への展開についての検討が求められる。これまでは短期のボランティアがほとんどであり、その中で学生は一定の学びを得ることはできている。しかし、先行研究にあるように、短期的なボランティアでは印象に残った場面を中心とした振り返りが主となる。中期的なボランティアを通じて、人間関係づくりのスタート時点だけでなく、その後には生じる葛藤や軋轢への対応を経て、安定して継続的な関係づくりについて学ぶ機会も必要であ

ろう。こうした中期的なボランティア活動の機会を講じることで、2週間という限られた期間の中で終わってしまう幼稚園教育実習や保育実習・施設実習などを補完することも考えられる。例えば、附属園でのボランティア活動や、近隣の学校園での学習支援ボランティア、子育て支援施設や障害者施設での中期的なボランティア活動などについて検討することが今後の課題として挙げられる。また、成績評価と関係しないアンケートを実施し、無回答項目などの分析を踏まえた上で、学生の真意に迫る工夫も必要であろう。

#### 参 考 文 献

- 1) 上續宏道(2017)「児童・家庭福祉における福祉教育・ボランティア学習への一試論—大阪市天王寺区の取り組みから—」『四天王寺大学大学院研究論集第 11 号』pp. 23-38
- 2) 岩田京子(2016)「サービスマネジメントの実施準備に関する一考察—本学科への適応を視野に入れて」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要第 48 号』pp. 241-246
- 3) 倉本哲男 (2009)『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 サービスラーニング (service-Learning) の視点から』ふくろう出版
- 4) 齊藤ゆか (2016)「ボランティア経験が教育実習に及ぼす効果と期待—インタラクティブな取組みの検討」『神奈川大学心理・教育研究論集 第 39 号』pp. 65-70
- 5) エドガー・H・シャイン著 金井壽宏監修 金井真弓訳(2009)『人を助けるとはどういうことか 本当の「協力関係」をつくる 7 つの原則』英治出版
- 6) ネル・ノディングス著 佐藤学監訳 (2009)『学校におけるケアの挑戦 もう一つの教育を求めて』ゆみる出版
- 7) 宮前良平(2017)「大学生ボランティア介助者における障害の透明化」『未来共生学第 4 号』pp. 127-159
- 8) 林一夫 (2015)「教員養成のためのボランティアやインターンシップの実態に関する調査研究—島根大学、仏教大学、明星大学の 3 事例を概観して」『明星大学研究紀要 教育学部 第 5 号』pp. 83-96
- 9) 岡澤哲子(2017)「生駒市の子育て支援事業「サンデーひろば」におけるボランティア学生の学び」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要 第 2 号』pp. 19-27
- 10) 犬塚美輪・三浦巧也・滝沢和彦(2017)「中長期的な学校支援ボランティア活動における学生の視点の変化」『大正大学研究紀要第 102 号』pp. 147-164
- 11) 熊詩織・岩田吉生「教員養成大学における特別支援教育の学校支援ボランティア活動の現状と課題」『障害者教育・福祉学研究第 13 巻』pp. 137-145
- 12) 佐藤大介・山根文男・江木英二・曾田佳代子・近藤弘行・後藤大輔(2016)「学生との協働によるスクールボランティア推進支援に関する実践的考察」『岡山大学教師教育開発センター紀要 第 6 号別冊』pp. 139-149
- 13) 浦田真理子・山口真理・平野光佐登(2016)「幼児保育学科学生による音楽ボランティア体験：意識の変容と表現力の向上に着目して」『松本短期大学研究紀要 第 25 号』pp. 87-96
- 14) 原田正樹 (2013)「福祉教育・ボランティア学習を巡る今日的な状況について」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 Vol. 21』pp. 37-46
- 15) 合津千香・保高一仁・春日仁子・横山芳子 (2015)「幼児保育・介護福祉・看護 3 学科合同「地域ボランティア演習」の成果と課題」『松本短期大学研究紀要 第 24 号』pp. 11-20
- 16) 三澤恵 (2015)「保育者養成校の学生の実習における対人コミュニケーション不安の考察—乳幼児・保育者・保護者に対するコミュニケーション不安の自由記述の分析」『子ども未来学研究 第 10 号』pp. 23-34